

10.

Zoster sine herpeteにみられる ぶどう膜炎の検討

(眼科) ○柏瀬光寿、山内康行、箕田 宏
後藤 浩、坂井潤一、白井正彦

目的：眼部帯状ヘルペスに伴うぶどう膜炎と同様の所見を示すものの、皮疹を示さずに発症するものがあり Zoster sine herpeteといわれている。しかし本症は全身的にVZV血清抗体価の上昇は認められず、確定診断は困難であった。今回我々は、Zoster sine herpeteにみられるぶどう膜炎と思われる8症例に対し、PCR法による診断確定を試み、またその臨床的特徴を検討した。

方法および対象：症例は、眼痛、霧視、球結膜の充血また罹患眼周囲の神経痛様の疼痛を主訴に来院した。所見として、皮疹は欠如していたが、豚脂様角膜後面沈着物、眼圧上昇、虹彩萎縮を伴う虹彩毛様体炎を認めた。Zoster sine herpeteにみられるぶどう膜炎を疑い、確定診断のため前房水を採取し、PCR法を施行した。

結果：PCR法を行った8例中、5例においてVZV DNAが検出された。それらの共通の所見として豚脂様角膜後面沈着物及び眼圧上昇を伴う虹彩毛様体炎で初発し、のちに色素性角膜後面沈着物、隅角の色素沈着、虹彩萎縮および瞳孔の不規則形と反応消失が認められた。これに対し、PCR法にてVZV DNAが検出されなかった3例では、上記の所見のうち隅角の色素沈着および瞳孔の不規則形と反応消失を認めず、また1例において色素性角膜後面沈着物が観察されなかった。

結論：Zoster sine herpeteにみられるぶどう膜炎の確定診断にPCR法が有用であった。豚脂様角膜後面沈着物、色素性角膜後面沈着物、隅角の色素沈着、眼圧上昇、虹彩萎縮および瞳孔の不規則形と反応消失は、PCR法の結果よりZoster sine herpeteにみられるぶどう膜炎の必須条件であると思われた。特に、瞳孔括約筋の障害を伴う虹彩萎縮は本症において重要な臨床所見であると考えられた。

11.

当救急医療センターにおけるこの1年間の整形外科的疾患

(救命救急) ○池上仁志、町田英明、小池荘介
(整形外科) 三浦幸雄

目的) 当院救急医療センターにおいて、整形外科的治療を要した疾患群に対して、その特徴と治療方法につき若干の検討を加え報告する。

対象) 対象は平成7年4月より平成8年3月までの1年間に、当センターに3次救急対応で搬送された91例である。内訳は男性61例、女性30例、年齢は2歳～89歳(平均年齢35.2歳)であった。

結果) 受傷原因は交通事故51例、自殺企図による飛び降り19例、列車への飛び込み1例、転落事故12例、転倒2例、第3者行為6例であった。

疾患群の特徴としては骨折部以外の他部に損傷を伴う外傷が84例と圧倒的に多かった。又外来で死亡した例は22例(来院時心肺停止19例を含む)であった。入院加療を行った67例において、整形外科的に緊急手術を行った四肢の骨折は13例(開放性5例、閉鎖性8例)、骨盤骨折に対する経動脈塞栓術(TAE)は2例に行った。その他の症例に対しては保存的治療にて急性期に対処した。また他科領域において緊急処置・手術を要したものは14例(脳外科1例、胸腹部外科10例、形成外科4例)であった。

当センターにおける平均入院期間は13日間で、最終転帰は転科・転床31例(整形外科23例、形成外科4例、精神科4例)、転院16例、退院12例、入院中死亡は6例であった。

考察) 3次救急対応となる整形外科的疾患は多発外傷、骨盤骨折、脊髄損傷等があげられる。合併症として出血性ショック、内臓器損傷、脂肪塞栓、crush syndrome等があり、その対応には細心の注意が必要であり、初期治療を誤れば生命・機能予後に重大な影響を及ぼすと考えられる。入院後の問題点としては、疾患群の多くは脳外科、外科、精神神経科等とのミット加療が不可欠な病態を有しており、他科との連携が治療効果、入院期間、予後に大きく影響すると思われた。